

## 働く人間の意味

問題は「組織」の側に



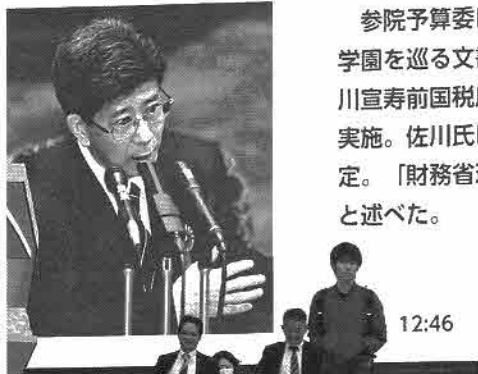
4月には新社会人の希望に満ちた顔に心が和む季節である。人手不足が明白になってきているから、希望する職種、仕事に就ける若者たちが多いことだろう。

20年ほど前の就職氷河期には不本意な就職も少なくなかった。自然災害の脅威に心動かされ、大学・大学院で火山性地震の研究

究を続けた若者がいた。日課のように山に登り、観測のために設置された地震計のデータを収集するという地味な作業を重ねて研究で学位を得た。

しかし、その研究を生かす就職先は見つからなかった。火山災害を担当する役所の門をたたいてみたが、7年前に採用したので、当分は火山の専門家

参院予算委  
学園を巡る文  
川宣寿前国税  
実施。佐川氏  
定。「財務省  
と述べた。



国会で行われた佐川宣寿前国税庁長官の証人喚問を伝える街頭の大型モニター＝3月27日午後、東京・秋葉原

なので、当分は火山の専門家には必要ないと選考の対象にもされなかった。

東海地震の危険性が注目され、南海トラフが問題になり、地震予知には大きな研究予算が付く時代だった。他方で火山噴火への関心は低かったから、当面必要はないとの役所の対応も仕方なかったかもしれない。

最近になって火山災害が

頻発するようになって、専門的な人材の不足が問題になっている。しかし、人材がなかったわけではない。専門性を持った若い力を戦力として採用し、育ててこなかった結果に他ならない。人材の育成には時間がかかる。それだけに長期の視点でどのような人材が必要かを考えた採用と育成の計画が不可欠になる。

人員削減を常に求められ続けていることは、言い訳にはならない。所管すべき行政の範囲は明確に定められているはずだから、それに見合う組織が作られ、必要な人材が準備されていることは当然のことだ。それが組織の第一の責任になる。

氷河期の若者たちには、不本意な就職を選択した人も少なくないだろう。彼らが今では、企業でも役所でも中堅の働き盛り、職場の中核的な存在になっている。入り口で思いのすれ違いがあったとはいえ、それでも彼らは貴重な戦力として長期の不況

下で奮闘している。

問題は「組織」の側にある。組織への忠誠を第一に長時間労働を求め、不本意な仕事も強制する。不正が発覚すれば隠蔽に走り、良心の呵責に耐えかねて死を選ぶ人が出てくる。そんな組織が、人材育成の責任を放棄して、近視眼的に際限のない忠誠こそ人材育成の成果と考えている。

不本意な仕事をすることは働き方の本来の姿ではない。仕事の内容に誇りを持つてることを若者たちは期待している。「働き方改革」であれば、誰もが納得できる仕事ができることが基本条件になる。それを満たすような人材育成が図られなければならない。公務員に文書の改ざんやデータの不正が発覚した。「誇りを持った仕事」の結果ではないだろう。そうした問題に自らの監督責任すらとらない政府に改革の旗を振る資格はない。

(東京大名誉教授 武田 晴人)